

論文の内容の要旨

論文題目 洲浜の表象文化史

氏 名 原 瑠璃彦

本論文が対象とするのは洲浜の表象である。

洲浜とは、洲が曲線を描きながら出入りする浜辺のことを指す。この海辺の表象が日本文化の様々な場面で見られる。

「洲浜」という語が最初に文献上に見られるのは平安時代の歌合の記録である。ここでの「洲浜」は、現実の海辺の風景を指すのではなく、ある作り物の呼称である。これは、後に「洲浜形」と呼ばれる曲線的な輪郭を持つ台であり、その上には和歌的表象のミニチュアがつくられる箱庭のようなものであった。これを本論文では以後「洲浜台」と呼ぶ。

平安時代、洲浜台は和歌とともに盛んに用いられた。当時の貴人たちは、洲浜台を和歌と組み合わせることで贈与に用いたり、内裏歌合のような晴儀の歌合において、その場の中心的な舞台装置として用いた。

洲浜台は、その場限りの一回性に基づくものであり、恒久的に保存されなかった。平安時代の洲浜台そのものは現存せず、また、それを描いた当時の図像資料も見られない。その情報は文献資料から得られるのみである。

洲浜台が上記のように和歌とともに盛んに用いられるのは、9世紀終わり頃から11世紀の終わり頃までの約200年間に過ぎない。ちょうど院政のはじまる頃より、歌合において洲浜台は用いられなくなり、また、和歌と組み合わせた贈与も見られなくなってゆく。一方

で、洲浜台とほぼ同じ形状をした島台などの祝賀的な飾り物は継承され、今日においても時おり婚礼の場などで用いられている。

もっとも、洲が曲線を描きながら出入りする浜辺のモチーフは、「洲浜」という語の初出以前から、庭園につくられていたことが発掘調査によって明らかになっている。こうした庭園における海辺のモチーフも、やがて「洲浜」と呼ばれるようになる。また、絵画に関して、平安時代の絵画はほとんど現存しないが、当時の文献資料、また、中世以降の現存する絵画に洲浜がしばしば描かれていることから、平安時代の絵画にも洲浜が盛んに描かれていたことが確実視されている。

洲浜というモチーフは、美術史や日本庭園の研究において日本独自のものと言われて来た。日本の文化は大陸からの影響が様々な点において濃厚であるが、洲浜という海辺の表象は大陸文化圏には見られないという。また、平安時代後期より庭園や絵画において極楽浄土が描かれる際、洲浜が用いられるようになるが、洲浜の表象とは、日本における聖地観とも関わっている。

洲浜の表象について、これまで様々な研究が重ねられてきた。洲浜を主題とした論文も複数存在する。これらの先行研究において、洲浜に関する基本的な一次資料は網羅的ではないものの整理はされている。しかしながら、洲浜台の機能、ならびに洲浜の表象の意義についての考察は不十分なものと思われる。これらの先行研究に関して総じて指摘できることは、洲浜という海辺の表象が何かということが正面から問われていないことである。また、本論文ではとくに歌合における洲浜台の機能を大きく取り上げるが、先行研究において、無論、歌合における洲浜台は取り上げられているものの、その考察は十分とはいえない。歌合とは総合芸術的な芸能であり、そうした動的な行為のなかで洲浜台がどのように用いられ、またそれがどのような機能を果たしていたかが綿密に考察されるべきである。そのときに鍵となるのが、従来の研究に抜けていた、天皇との関係性であり、これに注目することで洲浜台が担っていた機能が浮かび上がってくる。

本論文は、この洲浜台を徹底的に研究してこそ、後世の展開も含め、洲浜の表象の総体が明らかになってくるものと考え、洲浜台を主な対象としながら、日本における洲浜の表象文化史の全貌を明らかにし、日本文化史を新たな視点から読み直すことが本論文の目的である。

本論文は五つの章と二つの補論から構成される。第一部と第二部は、古代と中世以降という時代区分にも対応している。

第一部では、主に洲浜の表象の成立とその機能と意義について論じた。

「第一章 平安時代における洲浜台の諸相——和歌と組み合わせた贈与と天皇主催の晴儀の歌合」では、文献資料から洲浜台の平安時代における使用を追った。そこで対象となる

のは和歌と組み合わせた贈与と晴儀の歌合である。これによって、平安時代における洲浜台の基本的な性格を整理し、本論文が扱う問題のありかを明らかにした。もっとも、ここでは洲浜台が盛んに用いられた歌合のうち前半のもののみ、すなわち「天徳内裏歌合」(960)に代表される天皇親政の時代の晴儀の歌合を主に扱い、それ以後のものは第四章にゆずった。

「第二章 平安時代における和歌と風景の表象——和歌の観念的表象と政治的機能」では、まず平安時代に洲浜台が担っていた機能を明らかにするにあたって、当時の和歌と風景の関係について検討した。平安時代、平安京という都市では、後に「名所」「歌枕」と呼ばれるような観念的表象が貴人たちの間に成立しつつあった。これらの生成にあたっては、先行する和歌文学の蓄積のみならず、洲浜台のほか、屏風絵や障子絵あるいは庭園といった風景の表象が関与していた。こうした当時の和歌と風景の表象の状況を整理した上で、洲浜台の特異性、および、それが担っていた機能について論じた。そこでは、天皇の権力に関わる機能も問題となった。

「第三章 平安時代における洲浜の表象の意義」では、洲浜台が担っていた洲浜という海辺の表象そのものの意義を問うた。これは、洲浜台がしばしば賀歌と組み合わせて贈与されたこと、また、晴儀の歌合の場の中心に用いられたことの根拠を問うことでもある。ここでは再び同時代の屏風絵・障子絵、庭園等を参照し、当時、平安京という内陸の都市において、様々なかたちで海辺の表象が貴人たちの生活に持ち込まれていた状況を整理し、そのなかで洲浜の表象の持つ特異性について論じた。『古事記』『日本書紀』『風土記』などを参照することによって、洲浜の表象が常世思想のような海辺の古代信仰を背景としており、聖地性、清浄性を担っていると考えた。また、洲浜台が盛んに用いられた天皇親政の時代の歌合を、古代における歌垣、聖婚神話の視点から読み直した。

「補論一 海辺の経験と王権——八十嶋祭と『源氏物語』」では、平安時代、平安京において海辺が担っていた意義をより追求するために八十嶋祭を取り上げた。八十嶋祭は、鎌倉時代に廃絶して以来、今日にいたるまで再興されることのなかった天皇の即位儀礼であるが、この祭祀は、平安京という〈中心〉に位置する天皇の身体と、〈周縁〉としての難波浦・住吉浜という実在の海辺を間接的に接続するものであり、本論にとって極めて興味深い対象である。難波浦・住吉浜は、平安京にとってもっとも身近だったとも言える海辺であり、とくに住吉浜は後世の図像資料などからも洲浜の表象との結びつきが見られる。この祭祀を検討することによって、海辺が穢れを浄化するという機能だけではなく、権力者を新生させその資格を与える機能も有していたことが読み取れた。また、これらの議論を踏まえた『源氏物語』の再読からは、洲浜の表象を掌握することが権力を保証するというテーゼが浮かび上がった。

第二部では、洲浜台が平安時代において衰退してゆく過程を考察するとともに、その後の

日本文化の各所に見られる洲浜の表象、また、それに関わる事象の展開を跡付けた。

「第四章 洲浜台の衰退と浄土表象の成立——藤原頼通をめぐって」では、洲浜台が用いられた晴儀の歌合の後半を扱った。晴儀の歌合は、「高陽院水閣歌合」(1035)を皮切りとして藤原頼通によっておよそ半世紀ぶりに再興されるが、洲浜台は、徐々にその存在意義の欠如があらわになり、やがて歌合にも、和歌と組み合わせた贈与にも用いられなくなる。ここではその過程と意義について考察した。一方、頼通は晩年に平等院の建立に傾倒するが、この建築・庭園は、極楽浄土の表象として後世に大きな影響を与えるものであり、そこで洲浜の表象は重要な役割を担うことになる。本章の後半では、こうした洲浜の表象と極楽浄土の表象の結びつく展開を論じた。

「第五章 中世以降における洲浜の表象の系譜——洲浜・風流作り物・白砂」は、洲浜台が衰退した以後の洲浜の表象の展開を追った。そこでは主に、絵画や庭園のほか、風流作り物、日本文化の各所の様々な空間装置を取り上げた。また、ここでは、洲浜台を濫觴とする風流作り物の性格とともに、日本文化の各所において洲浜の表象が担っていた機能とその特徴について論じた。

最後の「補論二 洲浜の音——海辺の松風と波音」では、洲浜の表象の聴覚的側面を扱った。本論文は主に洲浜の表象の視覚的な側面について論じるものであるが、一方で、その聴覚的側面、すなわち、洲浜という海辺で聴こえる音はどのようなものが想定されていたのか、洲浜の表象が喚起する音とはいかなるものだったか、という問題を考えることも可能と思われる。そこで手がかりとなるのが「松風」であり、本章では様々な文献に記される海辺の音風景を参照し、そこから洲浜の表象の聴覚的側面の系譜を描き出した。

以上の考察から見えてきたのは、時代とともに洲浜の表象が抑圧されてゆく過程であった。本論文では最後に日本文化史における洲浜の表象の意義を評価し、洲浜の表象は日本的な表象を生み出す想像力を刺激する機能を持ち、「乳母」的な存在であったという仮説を提唱した。